様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：２１３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００８７２

研究課題名（和文）小学校英語教育におけるチャンツの効果とメカニズムの解明

研究課題名（英文）The effects and mechanism of chants practice in English education for elementary schools

研究代表者
川井　一枝（Kawai, Kazue）

宮城大学・基盤教育群・教授

研究者番号：４０６３９０４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,400,000円

研究成果の概要（和文）：公立小学校の英語教育におけるチャンツの影響を調査した。チャンツを用いた練習は短時間でも母音挿入やカタカナアクセントを軽減し、語彙習得を促進する可能性がある。英語母語話者は、児童の発話に日本人特有の訛りを感じているが、概ね理解できることが確認された。児童の多くは初見のチャンツを速くて難しいと感じ復唱は困難だった。児童の様子に応じた速度調整や視覚情報の提示など工夫が必要である。歌やゲームと書く活動に対する高学年児童の好みは分かれたが、6割以上は、歌やゲームの方が英語を覚えやすいと回答した。高学年児童は、書く活動を振り返り、今まで受けてきた体験的な音声指導の重要性と効果を実感していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
チャンツは、リズムに合わせ単語や表現を繰り返し唱える練習法（教材）である。主に子どもや初心者の指導で多用されているが、学習効果に対する検証結果は様々である。公立小学校の英語科設置に伴い、英語教育はますます低年齢化が進んでいる。効果的な指導を提案する上で、その効果を明らかにしていくことに意義がある。英語母語話者は8～9歳児童の英語に日本語母語話者特有の訛りを感じたが、チャンツによる口頭練習は母音挿入等を軽減し英語のリズム習得を促進する可能性が示唆された。外国語訛りはコミュニケーションを阻害しない場合もあり、国際社会の許容範囲も広いが、学習初期においては分かりやすい発音の提示と練習が必須である。

研究成果の概要（英文）：We investigated the effectiveness of chant-practice in English classes of public elementary schools, including student retention and motivation. It was confirmed that practice with chants, even for short times, may reduce vowel insertion and katakana accents and promote vocabulary acquisition. Native-English speakers who evaluated children’s speech in the experiments felt children’s accents had improved after chant-practice. We also found that many of the children felt the chant they heard for the first time was too difficult to recite. Teachers should adjust the speed of chants or provide visual aids according to their comprehension. In a questionnaire about activity preference for 6th graders, answers split fifty-fifty between songs or games activities and writing activities, although over 60% answered that songs and games were easier for learning English. Moreover, 6th graders recognized the importance and effectiveness of the experiential audio instruction they had received.

研究分野：外国語教育

キーワード：小学校英語教育　チャンツ　音声指導　技能面　情意面

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

チャンツは「リズムに合わせ英単語や英文等を繰り返し唱える練習法や教材」の総称で、子どもや初心者向けの音声指導の一つである。Carolyn Grahamが開発したジャズチャンツが発端とされ、日本でも1970年代後半から主に子ども向けの英語指導に使われてきた。2011年以降、公立小学校で英語活動が必修化となってからは、文科省配布の補助教材にもチャンツ（ジャズチャンツではなく独自に作成）が導入されてきた。本研究開始時（2018年）は、現行学習指導要領の移行期間だったが、使用される補助教材全てにチャンツの提示があり、現在、高学年が使う検定教科書においてもやはり多用されている。学習指導要領には「英語特有のリズムやイントネーションを体得することにより、児童が日本語と英語との音声面等の違いに気付く（文部科学省, 2017,p.26)」と記載があり, チャンツによる練習はその目標を具現化したと考えられる。チャンツの働きとしてはこうした音声面に加え、語彙や表現の習得を促進する（Graham,1978他）ことや、学習意欲の向上、また日本の子どもに対しては異文化理解を促進する可能性なども期待されている。しかし多用される反面、このような効果に対する検証結果は今のところ様々である。

大学生や成人を対象に研究代表者が行った調査では、チャンツを用いた音読練習は発音能力や学習意欲に肯定的な影響があることを確認したが、効果やメカニズムには未だに不明瞭な点が多く、特に子どもを対象とした調査は十分とは言えない。本研究では、今後も低年齢化が進むと推測される小学校英語教育の現場において、より効果的なチャンツの提示や指導法の提案が出来るよう、チャンツの効果やメカニズムを明らかにしたいと考え、本研究に至った。

２．研究の目的

児童の音声面や語彙習得ならびに学習意欲・異文化理解などの情意面に対して、「チャンツがどのように機能するのか」その効果やメカニズムを解明することを目指した。

３．研究の方法

本研究では、上記目的を達成するために以下の3つの調査を行った。

(1)発音面と発話数の変化

公立小学校4年生100名（3クラス）を対象とした実践では、担任が指導する授業の中でチャンツ練習を毎回5分程度行い、初回視聴後と5回目の授業でタブレット（iPad）を用いて各児童が発話するチャンツを録音し、英語母語話者2名が評価し、初回と5回目の結果を分析した。発話数は本研究を遂行する日本人教員2名が計測し、初回と5回目の結果を分析した。また、児童の振り返りや担任の観察記録から児童の情意面を分析した。

(2)通じやすさと外国語訛り

(1）の調査では、結果的に発音の評価が単語レベルになってしまったため、(2)の調査では、暗唱可能と推測される既知のチャンツを使用した。対象は公立小学校3年生96名（3クラス）である。初回は、半年ほど前に学習したチャンツを視聴し2回程練習して思い出してもらった後に、タブレット（iPad）を用いて、チャンツを発話し録音した。その後、授業（各2回程度練習）を2回挟み、4回目の授業で再度同じように録音した。発音の評価においては「通じやすさ」と「外国語訛り」に焦点をあて、英語母語話者2名が評価し、初回と4回目の結果を分析した。また質問紙を用いて、児童は、タブレット（iPad）で録音した自分の発話を聞いてどのように感じ、どのように自己評価をしているのかについて検証し分析した。

(3)書く活動との比較

公立小学校6年生60名（2クラス）を対象とした実践では、担任が作成したワークシートを使って書く活動中心の授業を行った。書く活動に対する気持ち、また歌やゲームの活動と比較して英語が覚えやすいか等、書く活動中心の授業に対して児童がどのように感じているか、質問紙調査を行った。自由記述はテキストマイニング（KhCoder）により分析した。

４．研究成果

(1)発音面と発話数の変化

本調査の結果を分析し、確認できた点は以下の5点である。

①初回の視聴後は多くの児童が、自分の記憶にあるカタカナの発音（マッシュルーム等）を思い出して発話する傾向がある。②事後テストでは、初回と比較し、英単語における母音挿入の減少やカタカナアクセントが緩和される可能性がある。③初回の視聴後は、多くの児童が、チャンツの単語をほとんど覚えておらず復唱が困難である。④事後テストでは、初回と比較し、発話数が有意に増える。⑤多くの児童にとって初めて聞くチャンツは「難しい」と感じているが、「チャンツは速くて難しい。でもおもしろい。」という記述が示すように「難しいけれどやってみたい」という児童の気持ちも確認できた。

本調査から考えられる教育的示唆は以下の 2 点である。まず、発音面・発話数の向上において、授業内の他活動の影響もあり、チャンツのみの効果と断定はできないが、短時間でもチャンツを活用した口頭練習は発音面・語彙の習得を促進する可能性があり、継続して取り入れることが望ましい。2 点目は、児童の「難しい」「おもしろい」という相反する 2 つの気持ちを考えて指導することである。多くの児童にとって初めて聞くチャンツは速く、難しいことがわかったが、簡単に復唱出来るゆっくりしたチャンツでは、「練習してみよう」という学習意欲には繋がらない可能性もある。また、英語のリズムに慣れ親しむ点においては、母音挿入を防ぐためにも、適度な「速さ」も重要と考える。ただし難易度は個人によって感じ方が異なるため、児童が途中で諦めないよう、励ましながら学習を進めることが重要である。児童の様子に応じて、教材の速度を調整する、視覚教材を提示するなど指導時の工夫が求められる。本調査の内容は、小学校英語教育学会中部・岐阜大会(2020 年)にて口頭発表、JES Journal(2021 年)21 巻にて論文発表した。

(2)通じやすさと外国語訛り

本調査の結果を分析し、確認できた点は以下の 7 点である。
①英語母語話者は、児童の発話を概ね理解しやすいと感じており、通じやすさに問題はなかった。②英語母語話者は、児童の発話に日本語話者特有の訛りを感じていた。③「通じやすさ」「外国語訛り」ともに事前テストの平均点よりも事後テストの方が高く、「外国語訛り」は有意に高かった。④2 回の質問紙調査の平均点に差はなかった。⑤7 割がタブレット操作に困難は感じていなかった。⑥9 割以上が録音する時に「楽しい」、自分の発話を視聴した時に「英語をもっと頑張ろうと思った」・「楽しい」と回答しており、英語の学習には全体的に意欲的であった。⑦4 割程度は、自分の発話を聞き「あまり上手ではない」と感じ、自由記述にも否定的な表現が見られた。

この調査から考えられる教育的示唆は以下の 3 点である。まず、(1)の調査同様に、授業内の他活動の影響もあり、チャンツのみの効果と断定はできないが、短時間でもチャンツを活用した口頭練習は発音面の向上を促進する可能性があり、継続して取り入れることが望ましい。次に、内省と改善を繰り返すプロセス自体が、目標を持って主体的に活動に取り組む態度につながるが、本調査では、主体的に学ぶ態度が児童の内省から十分に確認することができた。常態化している振り返りの活動が学習意欲につながっているか、適宜確認することは重要である。最後に、自分の発話を聞いて否定的に捉える児童が 4 割程度いたことから、否定的な気持ちを学習意欲に転換していくようなケアや工夫の重要性を再認識することである。本調査では、英語母語話者の事後の数値評価は事前よりも高く、児童の発音は僅かだが向上している可能性があった。しかし、日本語母語話者である児童や日本人教師にとっては、その僅かな違いに気付くのが難しかったと推測する。教員は、児童の自己肯定感が下がらないよう、向上心や自信につながっていくような発問や指示を継続的に心がけたい。本調査の内容は、小学校英語教育学会関東・埼玉研究大会(2021 年)、小学校英語教育学会四国・徳島研究大会（2022 年）にて口頭発表、東北英語教育学会研究紀要(2023 年)43 号にて論文発表した。

(3)書く活動との比較

本調査の結果を分析し、確認できた点は以下の 5 点である。
①9 割近くの児童が「書くこと」に好意的であり、練習を通して「慣れた」と回答した。②「もっと歌や音楽を聞いた方が覚えやすいか」の質問では、児童の好みが分かれ「覚えやすい」と「あまりそう思わない」が半々くらいの回答だった。③「英語を書く活動よりも、歌やゲームをした方が英語を覚えやすいと思うか」の質問では、6 割以上の児童が、歌やゲームをした方が英語を覚えやすいと回答した。④上記②と③の結果にはやや強めの相関があり、「もっと歌や音楽を聞いたほうが覚えやすい」と思う児童は「書く活動よりも、歌やゲームをした方が英語を覚えやすい」と思う傾向があった。⑤テキストマイニングで分析した自由記述の結果からは、「たくさん」「歌」「聞く」「覚える」「分かる」の繋がり、「歌」「音楽」「発音」に言及する内容などから、歌や音楽、ゲームなどを用いた従来の体験型音声指導の効果と重要性を児童自身がしっかり実感していたことが確認できた。

この調査から考えられる教育的示唆は以下の 2 点である。まず、担任の観察記録や児童が書いたワークシート、質問紙の結果から、高学年の児童には、抽象的な思考力の高まりや文字を学習する意欲が十分に育っていることが確認できた。次に、書く活動中心の実践を体験しながらも「発音」や「聞く」などの技能に関連付け、これまでの体験的な音声指導の効果を児童自身が実感していた点である。体系的な文字指導や「書くこと」は高学年児童の現状に合った相応しい活動であることを認識した上で、授業には歌やチャンツなどの音声指導もバランス良く、継続して取り入れていくことが望ましいと言える。本調査の内容は、小学校英語教育学会北海道研究大会(2019 年)、にてポスター発表、JES Journal(2020 年)20 巻にて論文発表した。

本研究では上記の通り、公立小学校の児童を対象に 3 つの調査を行い、チャンツに関する多くの研究成果や実践に対する教育的示唆を得ることが出来たが、期間内 3 年間はコロナ禍による制限もあり、メカニズムの解明にまでは至らなかった。次回の課題としたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　7件）

１．著者名 川井一枝，栄利滋人，鈴木渉	４．巻 43
２．論文標題 タブレットを用いたチャンツ暗唱の自己評価　：第3学年児童の内省と発音面に焦点をあてて	５．発行年 2023年
３．雑誌名 東北英語教育学会研究紀要	６．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.57539/telesjournal.43.0_1	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 柏木賀津子，山下桂世子，鈴木渉，北野ゆき，中田葉月	４．巻 22
２．論文標題 エビデンスベーストの英語の読み書き：小学校外国語を支える10回パッケージ文字指導	５．発行年 2022年
３．雑誌名 JES Journal	６．最初と最後の頁 184-199
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20597/jesjournal.22.01_184	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 萬谷隆一，堀田誠，鈴木渉，内野駿介	４．巻 22
２．論文標題 小学校英語に関する先行研究の収集と統合	５．発行年 2022年
３．雑誌名 JES Journal	６．最初と最後の頁 200-215
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20597/jesjournal.22.01_200	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 川井一枝，栄利滋人，鈴木渉	４．巻 21
２．論文標題 小学生にとってチャンツは難しいのか？：発音と発話数の変化に焦点をあてて	５．発行年 2021年
３．雑誌名 JES Journal	６．最初と最後の頁 20-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20597/jesjournal.21.01_20	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 川井一枝	4．巻 15
2．論文標題 英語リメディアル教育における音読指導再考：チャンツを用いた音読練習を通して	5．発行年 2021年
3．雑誌名 リメディアル教育研究	6．最初と最後の頁 57-71
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18950/jade.2021.04.20.01	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 川井一枝，栄利滋人，鈴木渉	4．巻 20
2．論文標題 小学校第6学年の児童を対象とした書く活動の報告：ワークシート，質問紙，観察に基づいて	5．発行年 2020年
3．雑誌名 JES Journal	6．最初と最後の頁 52-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20597/jesjournal.20.01_52	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Kawai Kazue	4．巻 30
2．論文標題 Effects of Reading Aloud Using A Chant Method: A Comparison of Acoustic Analysis and Human Ears	5．発行年 2019年
3．雑誌名 Annual Review of English Language Education in Japan	6．最初と最後の頁 193-208
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20581/arele.30.0_193	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 川井一枝，鈴木渉，栄利滋人
2．発表標題 暗唱したチャンツの自己評価：「通じやすさ」と「外国語訛り」に焦点をあてて
3．学会等名 第22回小学校英語教育学会四国・徳島研究大会（オンライン）
4．発表年 2022年

１．発表者名 川井一枝，栄利滋人，鈴木渉
２．発表標題 タブレットを用いたチャンツ暗唱の自己評価：児童は自分のパフォーマンスをどのように捉えているか
３．学会等名 第21回小学校英語教育学会関東・埼玉研究大会（オンライン）
４．発表年 2021年

１．発表者名 柏木賀津子，鈴木渉，山下桂世子，北野ゆき，中田葉月
２．発表標題 エビデンスベーストの英語の読み書き：小学校外国語科を支える１０回パッケージ文字指導の提案
３．学会等名 第21回小学校英語教育学会関東・埼玉研究大会（オンライン）
４．発表年 2021年

１．発表者名 萬谷隆一，堀田誠，鈴木渉，内野駿介
２．発表標題 小学校英語に関する先行研究の収集と統合
３．学会等名 第21回小学校英語教育学会関東・埼玉研究大会（オンライン）
４．発表年 2021年

１．発表者名 川井一枝，栄利滋人，鈴木渉
２．発表標題 チャンツは児童にとって難しいのか？：初回提示直後と練習後の復唱を比較して
３．学会等名 第20回小学校英語教育学会中部・岐阜研究大会（オンライン）
４．発表年 2020年

１．発表者名 鈴木渉
２．発表標題 主体的で深い学びを実現するための英語学習法・指導法：ランゲージングの理論と実践
３．学会等名 小学校英語教育学会秋田支部セミナー
４．発表年 2021年

１．発表者名 川井一枝，栄利滋人，鈴木渉
２．発表標題 歌やチャンツから書く活動へ：質問紙による予備的調査
３．学会等名 第19回小学校英語教育学会北海道大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 川井一枝
２．発表標題 チャンツを用いた音読指導の効果：練習時間の差に焦点をあてて
３．学会等名 日本教育工学会第34回全国大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 川井一枝
２．発表標題 リメディアル英語教育におけるチャンツの効果
３．学会等名 大学英語教育学会（JACET）
４．発表年 2018年

１．発表者名 川井一枝
２．発表標題 外国語教室不安と国際的志向性：英語リメディアル教育の視点から
３．学会等名 第44回全国英語教育学会全国大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 鈴木渉，齋藤玲，川井一枝
２．発表標題 新学習指導要領に見られる小・中学校の英語教育の特徴：計量テキスト分析による可視化
３．学会等名 第18回小学校英語教育学会長崎大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計8件

１．著者名 中田達也，鈴木祐一（編著），鈴木渉	４．発行年 2022年
２．出版社 研究社	５．総ページ数 230
３．書名 「子どもの英語学習」『英語学習の科学』	

１．著者名 萬谷隆一（監），堀田誠，鈴木渉，内野駿介（編著）	４．発行年 2020年
２．出版社 東京書籍	５．総ページ数 183
３．書名 小学校英語教育ハンドブック：理論と実践	

1．著者名 鈴木渉，西原哲雄（編著）	4．発行年 2019年
2．出版社 開拓社	5．総ページ数 224
3．書名 小学校英語のためのスキルアップセミナー：理論と実践を往還する	

1．著者名 中村典生（監），鈴木渉，巽徹，林裕子，矢野淳（編著）	4．発行年 2019年
2．出版社 東京書籍	5．総ページ数 306
3．書名 コアカリキュラム対応 小中学校で英語を教えるための必携テキスト	

1．著者名 吉田達弘，酒井英樹，廣森友人（編著），鈴木渉	4．発行年 2018年
2．出版社 大修館書店	5．総ページ数 336
3．書名 「学ぶ・教える・考える」ための 実践的英語科教育法	

1．著者名 西原哲雄（編著），川井一枝，相澤一美，柏木賀津子，會澤まりえ，小島さつき，金子淳	4．発行年 2018年
2．出版社 朝倉書店	5．総ページ数 180
3．書名 朝倉日英対照言語学シリーズ（発展編4）英語教育と言語研究	

1．著者名 鈴木渉	4．発行年 2019年
2．出版社 大修館書店	5．総ページ数 104
3．書名 「小学校現場と連携し東北の英語教育の中核を担う」『英語教育』68号	

1．著者名 鈴木渉	4．発行年 2018年
2．出版社 大修館書店	5．総ページ数 112
3．書名 「第二言語習得研究を理解するためのキーワード」『英語教育』増刊号	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	鈴木　渉 (Suzuki Wataru) (60549640)	宮城教育大学・教育学部・教授 (11302)	

7．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

8．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関